

## ニコラ・プッサン作《盲人を癒すキリスト（エリコの盲人）》（ルーヴル美術館）の寓 画的意味

望月典子（慶應義塾大学）

ルーヴル美術館所蔵《盲人を癒すキリスト》は、1650年にニコラ・プッサンがローマで制作したタブローである。新約聖書に基づく本作品について、先行研究は、視覚の回復というテーマから、光と影による色彩の生成や、視覚あるいは「絵画」の寓意というメタ絵画的な意味を抽出してきた。作品の注文主であるリヨンの絹織物製造業兼商人のレノン父子は、職業上、色彩やデザインに関心が深く、画家が色彩の生成などの寓意を本作品に組み込んだとしても不思議ではない。だが同時に、彼らはリヨンの大施物会の慈善病院と関わり、フランス・カトリック改革と連動する慈善活動に熱心な信仰厚い人物であったことを考慮するならば、宗教画としての側面についてもさらに詳しい考察が必要であろう。

この絵が盲人の治癒の場面を表していることは明白だが、イエスは公生涯に何度もこの奇跡を行っており、典拠となった具体的な福音書の箇所については今日なお特定されていない。実際、1667年の王立絵画彫刻アカデミー講演会で本作品が取り上げられた際、聖書への忠実さをめぐって議論が紛糾し、エリコでの盲人の治癒とする意見と、カファルナウムでの奇跡だとする意見に分かれて決着を見なかった。近年、後者の可能性を補強する意見が出されたが、当時、このような議論が起こったこと自体、プッサンが敢えて曖昧な表現を用いたことの証左であり、画家は特定の場面を忠実に描くこと以上に、鑑賞者に複数の聖書の箇所を連想させ、自由な瞑想の余地を残そうとしたと推測できる。そこで本発表では、本作品の典拠を特定することを一旦保留して、「盲人の治癒」というキリストの奇跡の行為そのものに焦点を当てて検討する。

まず、盲人の治癒の場面を描いた先行図像とプッサンの作品を比較し、特に当時の聖書の挿絵版画との構図の類似から、これまで本作品の題材として殆ど言及されなかったヨハネ福音書9章のエルサレムでの「生まれつきの盲人の治癒」との関連を指摘する。この作品は、エリコやカファルナウムでの奇跡に加えてエルサレムでの奇跡をも彷彿させているのである。さらに、画面に描き込まれたエンブレムのモチーフである「石」がチェーザレ・リーパの仏語訳版『イコノロジー』（1644）の「改悛」の像に由来し、そのモチーフのもつ意味、すなわちキリストの慈悲による罪の浄化が、ヨハネ福音書9章に関するアウグスティヌスやコルネリウス・ア・ラピデの聖書解釈と呼応することを示す。こうした意味の連想は、レノン父子の信仰や慈善活動とも密接に関わるものである。以上の分析により、本作品は、聖書の複数の箇所を連想させながら、「盲人の治癒」という奇跡がもつ聖書積義的な意味層での思索と瞑想を鑑賞者に促すものであったことを示し、プッサンのタブローにおける宗教画の特質の一端を明らかにする。